Japan Geoscience Union Meeting 2012
(May 20-25 2012 at Makuhari, Chiba, Japan)
©2012. Japan Geoscience Union. All Rights Reserved.

BPT27-05 会場:101A 時間:5 月 25 日 14:45-15:00

東アジアにおけるキンシコウの進化史について
Evolutionary history of Rhinopithecus (snub-nosed monkey) in East Asia

高井 正成 [1*], 張均翔 [2]
TAKAI, Masanaru[1*], Chun-Hsiang Chang[2]

[1] 京都大学霊長類研究所, [2] 台湾国立自然科学博物館
[1]Primate Research Institute, Kyoto University, [2]National Museum of Natural Science, Taiwan

Rhinopithecus（キンシコウ属、コロブス亜科、オナガザル科）は中国南部からベトナム北部にかけて散在的に分布している葉食性の比較的大型のサルである。一般に４種に分けられているが、どの種も絶滅に瀕している。しかしキンシコウ類の化石記録は、中国の下部?上部更新統から広範囲に渡って出土しており、かつてはその分布域が非常に大きかったことがわかっている。最近台湾南部の左鎮地域に分布する下部?中部更新統から見つかっていたサルの化石標本の中にキンシコウの化石が含まれていることが確認された。現在の台湾にはマカク属の一種であるタイワンザルだけが分布しているが、かつて台湾にもキンシコウが生息していたらしい。

後期鮮新世以降の東アジア地域の乾燥化・寒冷化とそれに伴う植生の変化により、台湾ではキンシコウ類は絶滅してしまったらしい。しかし対照的に同程度の大きさであったタイワンザルは、現在まで台湾に生き残っている。台湾と中国に置ける両者の対照的な進化史をもたらした要因は、生態的・行動的な違いによるものか、あるいは更新世の台湾に置ける偶発的なものなのかは不明である。中国大陸におけるキンシコウとマカクの化石記録とも比較して検討する。

キーワード: キンシコウ, 台湾, 進化史, 更新世, 化石
Keywords: Rhinopithecus, Taiwan, evolutionary history, Pleistocene, fossil